図書館だより
文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.155

2013年1月21日発行

東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

進化を求められている大学図書館 ―ラーニング・コモンズに注目―

文化学園図書館長・教授　宍戸　寛

2012年10月1日付の日本経済新聞朝刊に掲載された「議論しやすく図書館進化―共同学習スペース登場」という大見出しの記事が目に飛び込んできました。「…グループ発表など学生が能動的に学ぶ授業のスタイルに合わせた共同学習スペースが登場するなど多機能化が進む。パソコンなどを貸し出すほか、飲食を認めたり休憩できたりすることで長く図書館に滞在できる仕掛けも提供。学生目線の図書館改革は今後も続きそうだ」と、リードで報道され、本文では先進的な大学図書館の実例が紹介されています。大学図書館関係者の間では5年以上も前から話題になっていたサービス形態で、図書館用語でラーニング・コモンズ（learning commons）といわれているものです。コモンズを英和辞典でひくと、（町、村の）共用地、公有地となっています。文部科学省は大学図書館機能の強化という視点から、審議会等を通じて検討を重ねており、2010年12月に「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」を発表し、この中で、ラーニング・コモンズと呼ばれる用語を用いて大学図書館が学習支援を進める重要性について報告しています。

ラーニング・コモンズという用語を日本で初めて紹介した図書館人は東北大学図書館の米澤誠氏で、国立国会図書館定期刊行物「カレントアウェアネス」2006年9月20日に、「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」という題名で発表されました。米澤氏は、米国の5つの大学の事例を報告しています。そもそもは1994年南カリフォルニア大学がインフォメーション・コモンズの名称でスタートしました。大学図書館が単に場所と資料の提供だけにとどまるという「待つ」体勢ではなく、学生が議論しながら問題解決にあたれるよう、学習活動全般を支援していくための施設とサービスを提供していくというものです。そのためにグループ学習室等のスペースを整え、電子情報環境を整備していかねばなりません。

昨年7月には、『ラーニング・コモンズ　大学図書館の新しいかたち』（加藤信哉、小山憲司編訳、勁草書房）が刊行されました。海外のラーニング・コモンズを紹介しながら、国内の図書館の調査を独自に行い、今後の大学図書館の進むべき道を示しています。本学においても目下、グループ学習室新設の準備を進めており、今年3月には工事も終了し、完成の予定です。小さな一歩ですがアクティブなサービスが提供できるよう館員一同邁進していく覚悟です。

インテリアの教科書『MODERNIST PARADISE：Niemeyer House , Boyd Collection』

文化服装学院講師（ファッションデザイン画担当）　橋本　定俊

最初に読んだ本のことは、鮮明に覚えている。たぶんもう絶版になっていて、よほどの幸運に恵まれない限り、二度と手にすることはないだろう。それから幾冊もの本が世界を広げていってくれた。

1年前の晩春には、1880年代にアルチュール・ランボーが身につけていたといわれる、アナトミカ製のリネンコートに、鈴村和成訳の『ランボー全集　個人新訳』（みすず書房）を忍ばせ、下北沢の喫茶店で週末ごとに読み耽っていた。その夏は、A・ジラルドの生地が張られた1960年代のイームズのソファコンパクトに日がな一日寝そべって、鈴木道彦訳のサルトルの『嘔吐』（人文書院）を読んだ。この二冊の名訳は、翻訳の大切さを教えてくれる。1年前は、「俺」から「僕」になったランボーとともに永遠の美の中に分け入っていたし、その夏はサルトルの『嘔吐』の架空の港町ブーヴィルで耐えられない存在の表出に身を焦がしていた。

さて、本題に入ろう。『モダニスト・パラダイス―ニーマイヤーハウス（ボイド・コレクション）』である。

たぶんこの何年かの間で、最も大きな衝撃を受けた一冊で、モダンデザインの最良の紹介本となっている。すでにタイトルでお気づきのように、昨年104歳で惜しくも逝去したブラジリアの設計者オスカー・ニーマイヤーが、北米に唯一残した住宅（villa）が舞台である。取り壊しの運命にあったニーマイヤーのヴィラを買い取り、修復し、稀代のコレクションハウスにしてしまったのが、モダンデザイン家具のディーラーであるボイド夫妻だ。この本を手に取ったとたん、そのすごさに一瞬気を失いそうな感覚に襲われた。それほどすべてにおいて完璧と思われる演出を随所に感じた。

美しく修復されたニーマイヤーのヴィラに、シャロット・ペリアン、ジャン・プルーヴェ、リートフェルト、ヤコブセンらの家具が完璧に配置されている。そこにジョルジュ・ジューヴやリンドベリの陶磁器が豊かな彩りを与え、様々なオリジナルポスターや貴重なデザイン書籍が、所狭しとテーブルや壁面を飾っている。まるで、1980年代から本格的に再評価されてきた、モダンデザインの最終回答がここにあるのだと言わんばかりだ。圧倒的なセンスと選択眼によるコレクションが、本を開くたびに、発見と喜びと感動を与えてくれる。

モダンインテリアの教科書とも呼べる、この素晴らしい本の源流を、個人的にはニューヨークを中心としたロフトスタイルにあるのではないかと考えている。日本では75年の『Made in U.S.A.-2 アメリカのスクラップ・ブック』（読売新聞）で初めてニューヨークのロフトスタイルが紹介され、82年の「ブルータス」の「NEWS FROM NYC」で新古典主義やその後のモダンデザイン評価の息吹が伝えられた。95年発行の『Mid-century modern : furniture of the 1950s』では新表現主義の画家のアトリエと思われるロフトが紹介されており、すでにロフトは成功した人たちが誰の絵や陶器を飾り、どのストレージや椅子やテーブルや照明を使っているかが重要視される時代に突入したことを暗示している。96年の「エル・デコ」ではファッションイラストレーターのマッツ・グスタフソンのロフトに照準が当てられ、北欧ブームの先鞭となっている。ニューヨークのロフトを中心にアーティストたちの透徹したインテリアセンスのうねりから、成功者たちのインテリアコーディネートへ。このボイド・コレクションは、それをさらに発展、完全に近い形へと昇華させ、大きな衝撃をモダンデザインファンに与えていると思う。

＊M.Webb『Modernist paradise:Niemeyer House, Boyd Collection』Rizzoli, 2007〈757.8/W〉

『西洋束髪秘傳』

文化学園大学准教授（日本ファッション文化論、ファッション・メディア史担当）　田中　里尚

『西洋束髪秘傳：附化粧秘傳』（以下『秘傳』と記す）は、明治19（1886）年1月に出版された翻訳書である。翻訳者は伊藤重固、閲読者は東京大学教授の櫻井省三、校正者は山成哲造である。伊藤の出生生没は不明だが、『算学』と題されたブレスト造船所職工学校の教科書の翻訳を山成の校正で、明治11（1878）年に横須賀造船所から出版している。その「凡例」に「我横須賀造船所ニ於テ職工生徒の教則ヲ改正スルノ挙アルニ当リ此書ヲ訳シテ其教科書ニ供スベキノ議アリ乃チ熊谷直孝等ニ命ジ之ヲ訳セシム余も亦其末員に列セリ」（引用に際し漢字は新字体に改め、ルビも適宜省略する）とあるように、幕府から明治政府へ移管された横須賀造船所に勤務していた人物だったのではなかろうか。櫻井もまた、明治10（1877）年7月に「造船学為修業」にフランスへ留学を申しつけられており、当時造船所の「生徒」であったことは確認できる。したがって、この三者は横須賀造船所の中で知り合い、後年抄訳の依頼を何らかの形で受け、刊行におよんだのではなかろうか。

『秘傳』はフランスの著述家「路易達爾克夫人（るいーずだるく）」の書から、髪型と化粧の項のみ抄訳したものであると「序」において説明されるが、原本情報は記載されていない。原著者はMme Louise d'Arq（本名Alquié de Rieupeyroux, 1840-1910）と推定されるが、国立国会図書館蔵の『秘傳』著者の項にはLouis Claude Douët D'arcq（1808−1883）と書かれており、議論は分かれる。大きさは19×13cmで、定価は60銭と記載され、出版元は博聞社である。

幕末に結んだ不平等条約を改正するために、この時代には国内の習俗を西欧風に改めることで交渉を進展させようと、外務卿井上馨（かおる）により欧風化政策が推進された。明治16（1883）年ごろより、その傾向は明瞭となり、様々な分野に西欧化の風が吹いた。

女性の髪型も例外ではない。医師の渡邊鼎（かなえ）と「東京経済雑誌」記者の石川暎作らは、従来の結髪習慣に対し、不便・不潔・不経済と批判した。彼らは明治18（1885）年6月に「婦人束髪の会を起こす主旨」を発表後、「婦人束髪会」を結成し、束髪改良運動を起こす。この運動のうねりと並行して、『秘傳』は刊行されたのである。

次に内容を見よう。『秘傳』の構成は大きく「束髪部」と「化粧部」に分かれる。「束髪部」は「頭髪の療法」「束髪の自製法より其の諸器械」「各種束髪の束ね方」「髢（かもじ）の自製法」の4章に分けられると「緒言」は述べるが、内容面から見ると、頭髪管理法を述べた部分と結髪法を述べた部分の二つに分割できよう。

図版は25点におよび、年齢や場面に適合する束髪、束髪用の付属品、髢、髢を用いた束髪、髢を用いない束髪法などが図解されている。さらに、訳者による付録として明治18（1885）年4月の『Le Salon de la Mode』に紹介された「新式束髪」を前後面から描いた図版も2点掲載されている（図1はそのうちの1点）。ちなみに、明治21（1889）年に加藤正七方から刊行された同内容の書籍『西洋女装考一名化粧秘伝』では図版はすべて削除されており、その意味でも明治19年度版は貴重である。

さて「頭髪の療法」部においては、頭皮、頭髪の維持法と洗浄法についての知識が記されている。

ここでは「髪の脱落」と「繁殖」に焦点があてられる。例えば、著者は単に毛髪を短く刈っておくことが毛髪の強化にあたるという説の弊について論じたのち、毛髪の脱落の原因として、「夜の冷気」と「空気の流通」が妨げられることを挙げている。この二点は、矛盾するようにも見えるが、過度に地肌が冷気にさらされないようにすることと、髪を洗浄において清潔に保ち、「密櫛」で「一週に一回梳(くしけず)る」ことは適切な毛髪の維持法として矛盾していない。また、髪の「繁殖」法としては、「髪の性質を視て」アンモニア水など種々の薬品を用いることを推奨している。ただ、「脂気多き沾潤質の髪」は例外とする注意も忘れてはいない。

「束髪の自製法およびその諸器械」「各種束髪の束ね方」部においては、図版参照の指示がその都度記され、懇切な解説がなされている。そして「今諸君に伝授へ参らせんとする束髪は貴賤共に用いて妨げなし」として、民主的な立場から指南を行っているのが特徴である。

例として、第5図（図2）の「水製波紋形(みづせいなみがた)」の束髪法を紹介しよう。「髪を甚だしく潤したる後前頭帯様髪（頭の前部なる髪を二つに大別して左右に垂下し恰(あたか)も帯様をなすもの）を人々の好みに応じて縦線に若干条の小帯様に分け支那風に髪を束ねる有様にて此の帯様髪を引揚げ之を顔の方に傾け若くは顔に倒るるに至しめ然後髪の端より顔に向ひ疎櫛を透し其の髪を一様の大きさに広げ小帯様髪の端を頭上に上せて適意の波紋を作るべし」と順を追って具体的に解説がなされている。加えて、それぞれの束髪に合う年齢、場面、顔の形状、髪の太さなどが記されており、第5図の髪型は「霖雨又は暑熱の時候に宜し」とされ、「四十歳前後の婦人にして性来太き髪のものに宜し」と指南されている。

「化粧部」においては、皮膚の涵養に役立つ知識が披露されている。集中的に書かれているのは、顔の「健康」を「保持」するための「薬剤」の紹介、およびその製造法である。しかし、化粧品と化粧法についての言及はない。なぜなら原著者自身が「染顔術(かほをそむるじゅつ)」を「此の術は俳優の舞台顔に施して大に看客の眼を喜ばすことあれども之に用ふる薬剤は概ね皮膚を毀(そこな)ふのみならず又衛生上に大害あるを以て予は決して此の術を世の婦人に勧めざるなり」として批判的立場をとるからである。しかし、「人々は修飾を好む性質を具(そな)ふるは亦自然の理」として「最も有効無害」な頬紅、口紅、頭髪をより黒くする染髪剤、「染睫墨(まつけそめずみ)」「書眉水(まゆをゑかくみづ)」の製法は解説されている。こうした方法を実践できた人々は多くはないと思われるが、束髪と化粧に関する考え方を提供した書籍として理解すると興味深い。

『秘傳』の翻訳刊行と「婦人束髪会」の関係性は定かではない。しかし、『秘傳』の「緒言」において洋髪は「経済衛生の二点に益あるは勿論其の束ね方も格別苦難に渉らずして徒に時間を費すの患なし」と述べられ、「開明の今日に於て外国の女粧を研究せんと欲する婦人に極めて有用の書」と位置づけられていることから、この抄訳に込められた教育的意図は「婦人束髪会」の活動と通底するだろう。

近代以降の日本は海外の文物を見聞や翻訳によって消化し、知的国力を向上させてきた。本書もその実践として理解されるべきであろう。

図１　踏舞の新式束髪前面
上杉熊松写

図２　水製波紋形束髪
尾瀬田良恭写

『コロイドの話』

文化学園大学教授（テキスタイル企画演習、被服管理学担当）　**米山　雄二**

美しいテキスタイルを製作し、それを維持するために欠かせない知識・技術として、染色と洗浄がある。染色の工程で行うソーピングおよび布についた汚れを落とす洗浄では界面活性剤が重要な役割を果たしている。界面活性剤は染色時の過剰な染料や繊維に付着した汚れを、1μm（マイクロメートル）以下の細かい粒子にして水の中に分散することで、繊維から取り除く働きをもつ。このように物質を小さな粒子にした状態をコロイドという。コロイドという言葉は一般には聞き慣れないが、牛乳、マヨネーズ、バターなどの食品、化粧品、塗料、医薬品など身のまわりの中のいたるところに存在している。コロイドを研究する「コロイド化学」という分野は19世紀後半から20世紀にかけて新しい分野の一つとして大いに注目されて研究が進み、ラングミュア、ペラン、スヴェードベリなどのノーベル賞受賞者を生んでいる。

本書はコロイドの種類と性質、そしてコロイドと密接に関連する界面現象（ぬれ、吸着、膜、泡など）や界面活性剤の働きを解説するものである。このように書くと、化学の専門書で難しい本と思われてしまうが、本書はコロイドが示す現象を身近な例を用いて平易な文章で書かれている。例えば、章のタイトルは「油で波を静める―単分子膜の話」「一円玉は水に浮かぶか―ぬれの話」「濁った水を澄ます―コロイドの分散、凝集の話」「水と油は混ざるか―エマルションの話」「消える泡と消えない泡―泡の話」という具合である。また、理解しやすいように、簡単な図・写真を多く使っているのはもちろんであるが、歴史の中で人類がこれらの疑問に対してどのように見てきたかという話を織り交ぜている。

コロイド化学の基礎となる近代的研究をはじめた科学者は、アメリカ合衆国独立の立役者ベンジャミン・フランクリンである。彼は1769年に油の膜によって池の波を静める実験を行った。この現象は油分子が形成する単分子膜というものであったが、分子の概念がなかった時代であり、大発見には至らなかった。それが明らかになるきっかけとなるのは120年後のドイツの無名の若い婦人、アグネス・ポッケルスの研究によるものであった。ポッケルスは物理学が好きであり、高等女学校卒業後に病身の父母を世話しながら家事の合間に、台所の片隅で実験を行っていた。彼女が考案したシンプルな実験装置は水面に広がる油膜の圧力を測定するもので、原理は画期的であり、それを用いた研究は独創的であった。彼女は単分子膜の研究をしていた英国のレイリー卿に手紙を書いて自分の研究内容を伝えたところ、レイリー卿は彼女の研究の価値を素直に認め、賞賛し、科学雑誌「Nature」に紹介して研究論文が掲載される。ポッケルス28歳のときであり、彼女は一躍有名となる。この若い女性の研究成果と実験装置はその後、米国のラングミュアに引き継がれて研究され、分子概念の確立と解明に貢献することになり、ラングミュアは1932年にノーベル化学賞を受賞するに至るのである。本書は化学に詳しくなくても、コロイドについて興味深くわかりやすく解説しており、一読されることをお勧めしたい。

＊北原文雄著『コロイドの話』培風館1984〈431.8/K〉

図書館からのお知らせ

春季休暇特別貸出について

以下のとおり春季休暇特別貸出を実施します。

	新都心キャンパス	小平キャンパス
在学年次生・教職員		
貸出期間	2/5(火)～3/14(木)	2/5(火)～3/8(金)
返却日	4/10(水)	
貸出冊数	通常貸出冊数+2冊	
卒業年次生		
貸出期間	2/5(火)～3/1(金)	
返却日	3/4(月)	
貸出冊数	通常貸出冊数	

※卒業年次生の最終貸出日は3/1(金)です。以降の貸出はできませんのでご注意ください。

図書返却のお願い

延滞資料をお持ちの方は速やかに返却してください。資料の返却が遅れるとペナルティとして、一定期間、貸出・予約・取置き停止措置がとられます。

特に卒業年次に当たる学生は、借りたまま卒業しないようもう一度確認してください。図書館の資料は今後も多くの後輩たちに利用されるものです。郵送でも受け付けますので必ず返却してください。

閉館時の返却はブックポストをご利用ください。

年度契約の教職員および臨時職員の方へ

標記の職員で、平成25年度への継続が決定している方は、春季休暇特別貸出ができます。図書館総合カウンターに申し出てください。

3月で卒業(修了)する学生のみなさんへ

図書館は卒業後も利用することができます。ただし館内閲覧・コピーのみで、館外貸出はできません(閲覧・コピーも資料によっては制限があります)。

卒業生の入館受付時間は、月～金曜日は9:30～17:00、土曜日は10:00～16:00です。

利用の際には、卒業生であることを証明する下記のいずれかを受付に提示してください。

①同窓会会員証(大学:紫友会、学院:すみれ会・もみじ会、BUGU:OBOG会)

②卒業確認証

大学(新都心:教務課、小平:教学課)、学院(学務課)、BFGU(教学事務室)、BIL(教務部)各窓口で発行します。夜間と土曜日は、卒業確認証を発行できない窓口もありますので、事前にご確認ください。

なお、前期・後期の試験前から試験終了日まで、卒業生が利用できない期間があります。短縮開館期間などもありますので、詳細はホームページ「カレンダー(卒業生用)」で確認するか、電話で問い合わせてください。

※延滞資料がある間は利用できません。

グループ学習室の新設について

学習や研究などに役立ててもらえるように、グループ学習室を設置することになりました。

完成は今年3月末の予定です。利用方法等の詳細は決まりしだい掲示等でお知らせします。

不明な点はお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

TEL : 03-3299-2395(新都心キャンパス図書館) ／ TEL : 042-327-8859(小平キャンパス図書館)

図書館のホームページ　http://lib.bunka.ac.jp